

## マタイ21章33-44節 「見捨てられる石」

### 1A ぶどう園の収穫 33-41

#### 1B 僕への迫害 33-36

#### 2B 息子殺し 37-41

### 2A 神のなされた不思議なこと 42-44

#### 1B 要の石 42

#### 2B 神の裁き 43-44

## 本文

マタイによる福音書 21 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、20 章まで来ましたが午後の礼拝で 21 章を一節ずつ学びます。今朝は、21 章 33-44 節に注目したいと思います。

「33 もう一つのたとえを聞きなさい。ある家の主人がいた。彼はぶどう園を造って垣根を巡らし、その中に踏み場を掘り、見張りやぐらを建て、それを農夫たちに貸して旅に出た。34 収穫の 때가近づいたので、主人は自分の収穫を受け取ろうとして、農夫たちのところにもべたちを遣わした。35 ところが、農夫たちはそのしもべたちを捕らえて、一人を打ちたたき、一人を殺し、一人を石打ちにした。36 主人は、前よりも多くの、別のしもべたちを再び遣わしたが、農夫たちは彼らにも同じようにした。37 その後、主人は『私の息子なら敬ってくれるだろう』と言って、息子を彼らのところに遣わした。38 すると農夫たちは、その息子を見て、『あれは跡取りだ。さあ、あれを殺して、あれの相続財産を手に入れよう』と話し合った。39 そして彼を捕らえ、ぶどう園の外に放り出して殺してしまった。40 ぶどう園の主人が帰って来たら、その農夫たちをどうするでしょうか。」

41 彼らはイエスに言った。「その悪者どもを情け容赦なく滅ぼして、そのぶどう園を、収穫の 때가来れば収穫を納める別の農夫たちに貸すでしょう。」42 イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、聖書に次のようにあるのを読んだことがないのですか。『家を建てる者たちが捨てた石、それが要の石となった。これは主がなされたこと。私たちの目には不思議なことだ。』43 ですから、わたしは言うておきます。神の国はあなたがたから取り去られ、神の国の実を結ぶ民に与えられます。44 また、この石の上に落ちる人は粉々に砕かれ、この石が人の上に落ちれば、その人を押しつぶします。」

私たちはついに、イエス様がエルサレムに入城する場面に入ってきます。これまでのガリラヤにおける宣教が終わり、エルサレムへの旅を終え、ついにオリーブ山からろばに乗られて、エルサレムに入ってきました。そこでイエス様が行われたのは、公にご自身がメシアであることを群衆が歓喜の声を挙げて迎えることを許されたことです。ご自身を、イスラエルのメシアとして公式に、エル

サレムの宮の中に入られたのです。そして宮の中にある、商売で売り買いしている者たちを追い出し、両崖人の台をひっくり返し、鳩を売る者たちの腰掛を倒されて、宮清めをされました。そして、先ほど詩篇 118 篇を読みました、「ああ主よ どうか救ってください。(25 節)」という言葉がありました。この言葉、救ってくださいは「ホサナ」ですが、子供たちまでもが叫んでいました。

そしてその次の日に、祭司長たちや町の長老たちがやって来て、「何の権威によって、これらのことをしているのですか(23 節)」と回答を要求しましたが、イエス様は返答を拒否されました。そして、三つの譬えを話されます。今、読んだところは二つ目の譬えです。

### 1A ぶどう園の収穫 33-41

#### 1B 僕への迫害 33-36

33 もう一つのたとえを聞きなさい。ある家の主人がいた。彼はぶどう園を造って垣根を巡らし、その中に踏み場を掘り、見張りやぐらを建て、それを農夫たちに貸して旅に出た。

イエス様の譬えは、聞いている人にとってはとても身近なもので、誰でも理解できるものでした。当時、主人が所有地を持っていて、それを農夫に貸して労働させていました。主人は都市部に住み、収穫時にその収穫を受け取りに来ます。その小作農たちは、その一部を分け前としてもらいますが、基本的に収穫は主人のものです。ここでの主人は、とても寛大な人であったことが分かります。自ら、ぶどう園を造って垣根を巡らし、ぶどうの実がなった後にそれを足で踏んでぶどう汁を出すようにさせる、踏み場を作りました。それから、盗賊が来て盗まないように見張りやぐらも立てています。そこまでお膳立てをして、農夫たちに貸して旅をしています。

この話を祭司長たちや長老たちが聞いている時に、彼らは聖書をよく知っていますから、イザヤ 5 章の愛の歌をすぐに思い出したに違いありません。「1 「さあ、わたしは歌おう。わが愛する者のために。そのぶどう畑についての、わが愛の歌を。わが愛する者は、よく肥えた山腹にぶどう畑を持っていた。2 彼はそこを掘り起こして、石を除き、そこに良いぶどうを植え、その中にやぐらを立て、その中にぶどうの踏み場まで掘り、ぶどうがなるのを心待ちにしていた。ところが、酸いぶどうができてしまった。」そしてイザヤは、このぶどう畑はイスラエルとユダを指しており、彼らが結むべき実は正義や公正であったのに、流血や悲鳴という酸いぶどうの実が出来てしまったということ、喩えていることが分かります(7 節)。

イエス様は、この前の日に、両替人の姿や家畜を売る姿を見て、強盗の巣にしていると咎め、宮清めをなされたばかりです。神を礼拝するのであれば、その礼拝するにふさわしい実が結ばれていなければならないのに、酸いぶどうの実が出来てしまった、ということ暗に言い含めておられるのです。

34 収穫の 때가近づいたので、主人は自分の収穫を受け取ろうとして、農夫たちのところにもべたちを遣わした。35ところが、農夫たちはそのしもべたちを捕らえて、一人を打ちたたき、一人を殺し、一人を石打ちにした。36主人は、前よりも多くの、別のしもべたちを再び遣わしたが、農夫たちは彼らにも同じようにした。

主人の僕たちとは、預言者のことです。イスラエルの歴史の中で、主に対して実を結ぶように、主に立ち返るように預言するため、神から遣わされた数々の預言者がいました。けれども、それらの預言者たちは、イスラエルの指導者、政治指導者だけでなく宗教指導者もそうでしたが、彼らを迫害したのです。そしてイスラエル王国が、神に背いていたため敵国に侵略される危機が近づいてくると、主はますます多くの預言者を遣わされました。私たちは、旧約聖書を通読している時にイザヤ書からマラキ書まで読みました。ハガイ書、ゼカリヤ書、そしてマラキ書はユダヤ人帰還の後の預言書ですが、それ以外はすべてイスラエル王国とユダ王国に対してアッシリアやバビロンによって滅ぼされることを警告した預言者で、数多く出てきました。彼らをもイスラエルの指導層は迫害しました。そして、警告したことが全てその通りになったのです。

使徒の働きにて、ステパノがユダヤ人議会のサンヘドリンに連れて来られて、神殿を冒瀆しているという告発で、尋問を受けました。その時に彼は、イスラエルの歴史をアブラハムから語りました。ヨセフの話を長く行い、モーセの話も長く行ないました。二人に共通しているのは、「同胞に初めは受け入れられなかった」ということです。ヨセフは兄たちによってエジプトに売られてしまいました。そして兄たちがエジプトに下って来た時に、確かにヨセフが見た通りに、彼らがヨセフの前でひれ伏しました。モーセも同じです。40歳の時に同胞イスラエル人を救おうとしましたが、かえってイスラエル人から拒まれました。それで荒野に逃げて、そこで40年暮らした後で、エジプトに戻ったらイスラエルの長老たちが彼を預言者として受け入れました。このように、初めは受け入れられなかったのです、けれども二回目は受け入れられます。

このことなどを語って、それで彼の話を聞いていたユダヤ人たちにこのように言いました。「51うなじを固くする、心と耳に割礼を受けていない人たち。あなたがたは、いつも聖霊に逆らっています。あなたがたの先祖たちが逆らったように、あなたがたもそうしているのです。52あなたがたの先祖たちが迫害しなかった預言者が、だれかいたでしょうか。彼らは、正しい方が来られることを前もって告げた人たちを殺しましたが、今はあなたがたが、この正しい方を裏切る者、殺す者となりました。」この正しい方とは、イエス様ご自身です。次が、その話になります。

## 2B 息子殺し 37-41

37その後、主人は『私の息子なら敬ってくれるだろう』と言って、息子を彼らのところに遣わした。38すると農夫たちは、その息子を見て、『あれは跡取りだ。さあ、あれを殺して、あれの相続財産を手に入れよう』と話し合った。39そして彼を捕らえ、ぶどう園の外に放り出して殺してしまった。

これまでは、主人の僕を遣わしていました。けれども主人は息子自身を遣わしました。神の御子イエス様のことです。イスラム教では、イエスはモーセなど数ある預言者たちと一緒に語ります。けれども、ここでイエス様ははっきりと、ご自身が単なる預言者ではなく、神ご自身の御子であることを宣言しておられます。

そして、指導者たちは妬みます。イエス様はかつて、この宮が自分の父の家であることを話しておられました。イエス様をご自分を神と同等に置いていることに腹を立てていました。それがここでは、「あれは跡取りだ。さあ、あれを殺して、あれの相続財産を手に入れよう」と言っています。恐ろしいことです、自分たちが神の宮において、礼拝者ではなくまるで所有者であるかのようにふるまうということは。イエス様を宮に受け入れ、この方にひれ伏し仕えるのではなく、自分が主人であり、イエス様を締め出してしまうのです。

40 ぶどう園の主人が帰って来たら、その農夫たちをどうするでしょうか。」41 彼らはイエスに言った。「その悪者どもを情け容赦なく滅ぼして、そのぶどう園を、収穫の時が来れば収穫を納める別の農夫たちに貸すでしょう。」

彼らは、自らを罪に定めました。イエス様の話について行って、そのしかるべき処罰を述べました。悪者どもを滅ぼして、収穫を納める別の農夫に貸します。

## 2A 神のなされた不思議なこと 42-44

### 1B 要の石 42

そこでイエス様は、神のなされた不思議なこととして語られます。42 イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、聖書に次のようにあるのを読んだことがないのですか。『家を建てる者たちが捨てた石、それが要の石となった。これは主がなされたこと。私たちの目には不思議なことだ。』

これは、詩篇 118 篇 22 節からのものです。「」詩篇 118 篇は、ハレル詩篇と呼ばれるメシアの詩篇の一つです。113 篇から 118 篇までをハレル詩篇と呼び、主への祭りの時に歌われるものです。この詩篇 118 篇の後半部分が、最後の週で何が起こったのかを知るのに非常に重要な預言と背景になります。午後の礼拝の時にじっくりと見てみたいと思います。

聖書は、神を「石」また「岩」として表現しているところがたくさんあります。イスラエル人が紅海を渡り、荒野の旅をしている時に、モーセが杖で打った岩から水が出てきました。パウロはその岩をキリストだと言いました。「そしてみな、雲の中と海の中で、モーセにつくバプテスマを受け、みな、同じ霊的な食べ物を食べ、みな、同じ霊的な飲み物を飲みました。彼らについて来た霊的な岩から飲んだのです。その岩とはキリストです。(1コリント 10:2-4)」イエス様が、その肉体が鞭打たれて、十字架に磔にされ、それゆえにその方から清めの御霊が流れ出て、私たちに霊の命を与えま

す。打たれた岩としてキリストが描かれています。

申命記 32 章、モーセが最後の説教をしている最後の部分で、歌をうたいました。4 節でこう言っています。「主は岩。主のみわざは完全。まことに主の道はみな正しい。主は真実な神で偽りがなく、正しい方、直ぐな方である。」続けて 15 節にも、こう歌っています。「エシュルンは肥え太ったとき、足で蹴った。あなたは肥え太り、頑丈でつややかになり、自分を造った神を捨て、自分の救いの岩を軽んじた。」神が救いの岩であるとしています。そして 18 節、「あなたは自分を生んだ岩をおろそかにし、産みの苦しみをした神を忘れてしまった。」イスラエルを生み出した神を岩と呼んでいます。そして、ダビデも同じようにして、人生の後世に歌をうたいました。こう言っています。サムエル記第二 22 章 31-33 節を読みます。「31 神、その道は完全。【主】のことは純粹。主は、すべて主に身を避ける者の盾。32 【主】のほかにも、だれが神でしょうか。私たちの神のほかにも、だれが岩でしょうか。33 神は私の力強い砦。私の道を全きものとされます。」モーセが預言していたのと似ていますね、神が完全な方で、正しい方、そして身を避けることのできる方です。

モーセたちが荒野の旅をしている時に、そこは砂というよりも岩でした。私がイスラエル旅行記を書く時に、沙漠の漢字を変えています。砂の砂漠ではなく、さんずい(シ)に少ないと書く沙漠にしています。なぜなら、砂ではなく岩地だからです。そしてイスラエルも岩地です。四つの土の種類の譬えで、岩地の上に蒔かれた種について書いてあります。土がとても浅い話ですが、岩はイスラエルにもあふれているものです。それで、安定しているもの、いつまでも変わらないもの、そこから完全である、正しい、真つすぐであり、そして頼れば安全である、救いがあるというイメージがあります。そして詩篇には、自分を岩に導いてくださいという祈りが書かれています。「61:2 私の心が衰え果てる時、私は地の果てから、あなたを呼び求めます。どうか、及びがたいほど高い岩の上に渡しを導いてください。」

しかし、その石を、家を建てる者たちが捨ててしまったというのです。一つの逸話があります。ソロモンが神殿を建てる時に、その場で石切りを行っていませんでした。石切り場のところで石を切り、それを神殿にまで運んでいったのです。「I 列王 6:7 神殿が建てられたとき、石切り場で完全に仕上げられた石で建てられたので、工事中、槌や斧や、いかなる鉄の道具の音も、いっさい神殿の中では聞こえなかった。」とあります。ですから、どこに石がどこに行くかを、印を刻んでいたのでしょうか、分かるようにしていました。そして、建造物には「要石」があります。その石があって、初めて全体を支えることができるものです。建物の場合、隅の角にある石であります。ところが、その石がどこに行くのか？分からずに、「たぶん余った石なのだろう」ということで、そこら辺に捨て置いていました。ところが、建築が進むうちに要石がないことに気づきます。お～い、どこにあるんだ？というので、みなぐまなく探していたら、捨て置かれていた石があって、それが要石だったという逸話です。

このような逆説的なことが起こることを、メシアが来られることを預言するハレル詩篇の中に入っています。「これは主がなさったこと。私たちの目には不思議なことだ。」とあります。そうです、神の家を建てる者たち、霊的にイスラエルの家を神にあって建て上げるはずの者たちがメシアを捨て置いてしまうのです。これだけでもあまりにも悲劇であります。それだけでなく、実はその悲劇を使って、その捨てられた石を神はむしろ要石としてくださるという驚くべきことを行われたのです。キリストの十字架は、ある異端の団体が言うように神の失敗ではありません。十字架につけられたキリストこそが、全ての人を救うことのできる神の力なのです。「1コリ 2:8-9 この知恵を、この世の支配者たちは、だれ一人知りませんでした。もし知っていたら、栄光の主を十字架につけはしなかったでしょう。しかし、このことは、「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、人の心に思い浮かんだことがないものを、神は、神を愛する者たちに備えてくださった」と書いてあるとおりでした。」だれもが考えつきもしない知恵をもって、神は全ての人を罪から救うご計画を立てておられたのです。

先日、インターネットで、世界遺産に長崎の潜伏キリシタンが登録されたことを懸念するジャーナリストの意見を見ました。潜伏キリシタンとは隠れキリシタンのことですが、日本がこんなにひどい弾圧と迫害を行なっていることが一方的に伝えられたら、世界の人が日本を酷い国だとして戦わないか？という懸念です。私は思わず、そのジャーナリストの方に意見を出しました。「キリスト者の信仰というものは、そもそもが迫害を受けるのはイエスが言われたとおり、とっていて、これによって迫害者を恨むとか憎むとか、そういったものはありません。ましてや反日にはなりません。むしろ、迫害する者のために祈り、祝福しなさいという命令があり、私たちキリスト者にとっては、信仰の純化のお手本のような歴史なので、まさか日本をこれで嫌いになれ、なんていう発想が浮かびません。」私たちは日本を憎んでなんかいませんよ、ということをお伝えしました。

国など、権力者が信仰を持った人々に酷いことをしたならば、その国に憎しみをぶつけるはずだろうと思うのが普通です。しかし、私たちの信仰では不思議にそうならないのです。なぜなら、キリストが十字架に付けられたからこそ、私たちの罪のためのいけにえとなってくださり、それで私の罪が赦されました。この方を主としているのですから、信仰のゆえに迫害を受けたら、それは神の御心で起こっていることです。キリストの苦しみにあずかっていることです。国を恨むということにはならないのです。

## 2B 神の裁き 43-44

**43 ですから、わたしは言うておきます。神の国はあなたがたから取り去られ、神の国の実を結ぶ民に与えられます。**

メシアを拒んだことによって、ユダヤ人指導者たちから神の国が取り去られます。先ほどの、ぶどう園の譬えに戻っています。しかし、神の国の実を結び民に与えられるとイエス様は言われます。

紀元後 70 年に、ローマがエルサレムの神殿を破壊しました。そして、実を結ぶ民は、ユダヤ人だけでなく異邦人も加えられた教会に対してのものとなりました。イエス様は弟子たちにも、「あなたがたはぶどうの木の枝で、わたしがぶどうの木である。」ということを言われましたね。枝は、実を結ぶために存在しており、実を結ばなかったら火で焼かれてしまうことをイエス様は言われました。

私たちは、実を結ぶために存在しているのです。実というのは、ガラテヤ書 5 章によれば、愛です。愛の現れとして、いくつかの特徴があります。「ガラテヤ 5:22-23 しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。このようなものに反対する律法はありません。」主は、いつも私たちからご自身が現れることを願っておられます。キリストが生み出されることを、祈っています。そして、聖霊の実である愛が結ばれることを願っておられます。今は、教会が神の建てておられる家です。その部分を私たちは担っています。そしてその間から、愛の結びつきの実が結ばれることをいつも、待っておられるのです。私たちが救われたのは、良い行いによるものではありません。しかし、良い行いのために救われました。救われた者として、愛の実を結びます。

44 また、この石の上に落ちる人は粉々に砕かれ、この石が人の上に落ちれば、その人を押しつぶします。」

イエス様は、ユダヤ人指導者にもう一つの裁きを語られます。石、つまりご自身の上にあなたがたが落ちて砕かれること、あるいは、その石が人の上に落ちて、押しつぶされることを話しています。これは、それぞれが旧約時代の預言にかかわることですが、それについては午後礼拝でお話ししましょう。今、ここで申し上げることは、私たちがこの方の上に落ちる時、砕かれるということです。それは救われるための砕かれることもあるでしょう、けれども、もし拒むのであれば、滅ぶために粉々に砕かれます。そして、後にこの方が来られます。石が上から落ちてくるのです。それは再臨です。イエス様が王の王、主の主として来られる時に、砕かれてしまいます。その時が来ないうちに、主に対して悔い改めよう、ということです。